英語新カリキュラム（経済・経営・法・工学部）実施初年度の経過と課題

英語教育センター　渡部友子・矢島真澄美・薄井洋子

はじめに

英語教育センター（以下「センター」）は2015年４月に発足し、今年度が３年目である。初動２年間の経緯は、2015年度末と2016年度末に本誌で報告済みである。2017年度は経済・経営・法・工学部で新カリキュラムが開始され、センターの主たる業務である必修英語教育の組織的運営が本格的に始まった年である。本稿では、この１年でどのようなことが実施され、どのような問題が発生し、それにどう対処してきたか、および次年度の計画を渡部が報告する。さらに、新入生へのアンケート調査で明らかになった英語学習の実態を、矢島と薄井が分析・報告する。

１．新カリキュラム開始の準備

今年度の準備は、前年度の秋から始まった。なぜなら、新カリキュラムの「英語IA」「英語IB」の担当者を配置すると同時に、どこがどう変わるのかを彼らに説明しなければ、シラバスの執筆に支障を来すからである。

新入生はテストスコアにより５グレードに分けられる。よって教員を配置する前に、グレードごとの開講コマ数を決めなければならない。これには2016年度新入生のスコアデータを使用し、能力分布を予測して以下のように決定した。なおグレードはaが最も高く、eでは補習授業「ベーシック英語」が課される。数字は開講クラス数を表す。

経済学部	a2, b2, c5, d5, e3
経営学部	a1, b1, c2, d3, e2
法学部	a1, b2, c3, d2, e1
工学部	a2, b2, c4, d4, e2

これと同時に、各グレードの２年間での達成目標の素案を作成した。参考にしたのはCEFR-J（英語到達度指標の日本版）で、「どんなことができる（CAN-DO）ようになることを目指すのか」のイメージを記述している。

上記４学部の「英語IA」「英語IB」を担当する教員（専任および非常勤）に対する説明会は、2016年11月の連続する５日間の昼休みを使って行われた。説明は、斎藤（センター長）、渡部（副センター長）、秋葉（センター所員）、岸（同）が分担し、TOEIC Bridge のスコアにより（以前より厳密な）能力別のクラス編成になること、能力に合わせて4技能を伸ばす指導をしてほしいこと、シラバスは一部の項目の記述をセンターが指定する共通の書き方にすること、など

が伝えられた。説明会に出席しなかった教員には説明資料を配布し、問合せをセンターが受ける形にした。また説明会とは別に、各グレードに対応すると思われる教科書見本をセンター特任講師が何冊か選び、講師控室に配置した。これは非常勤教員の教科書選びを助けるためである。

シラバス入稿後に確認したところ、共通記述を指示通りに入力していないものが少なからずあった。予めセンターでその部分を入力し固定できれば、この問題は避けられるのだが、システム上難しいようである。最終的には、全シラバスをセンターでチェックし、必要な修正を行った。センターが提示した教科書見本については、どれほど役立ったかは不明である。選定の目安としての提示だったが、見本の中から選ばなければならないと誤解した教員もいたらしい。

新入生を迎える準備が進む中、大学生協から「TOEIC Bridgeに関する問合せが多く、問題集もよく売れている」との報告が入った。このことは、前年度の本誌報告書の末尾で触れた通りである。この反応は、推薦系の入学予定者に対し、新しい英語教育についての説明文書を送ったことによるものだと思われた。そしてこのことから、入学生のスコアが前年度より高くなるかも知れない、と期待を込めて報告書を結んだが、この予感が４月に現実となる。

３月に入り、TOEIC Bridgeの実施準備を進めつつ、教務課など各方面との間で、クラス確定と登録の段取りが調整された。さらに、当日欠席するなどしてテストを受けない学生への対応が検討された。これまでは、スコアのない学生のクラス配属は、その能力を測定しないまま恣意的に決められていたようである。しかし新カリでは、所属するグレードが成績に影響を与える（第3節で後述）ため、その学生の英語能力を何らかの形で測定し、適切なレベルに配属することが望ましい。

そこでテスト未受験者には、入学前に受験した検定試験があればその結果の提出を、ない場合は簡易テストの受験を求めることにした。簡易テストは２種類用意した。１つは「eクラス相当か否か」を確認する10分の基礎テスト、もう１つは「英検３級程度の能力があるか」を確認する30分のテストである。この２つの結果により、c-d-eのどれかに配属することを原則とした。

以上の検討を踏まえて、新入生向けの「英語履修ガイド」が作成された。英語科目の名前、TOEIC Bridgeのスコアの意味、グレード別クラス分けの意味、シラバスの見方などを説明した12ページの小冊子である。これが新入生への配布物の中に入り、４学部の新入生担当グループ主任にも配られた。その後、英語教育センターのHPにも掲載されている。

２．2017年度入学時プレイスメントテスト実施とクラス分け

TOEIC Bridgeは、前年度と同様、新入生オリエンテーション初日の午前に実施された。泉では実施本部に渡部、岸、特任講師３名が入り、多賀城では工学部のセンター所員の交代に伴い、事前に打ち合わせをした上で新所員の嶋敏之先生に統括をお願いした。本年度泉では、テ

スト開始直前に（不安になって）退出する学生を別室で受験させる体制をとった。それでも新カリ４学部の未受験者は13名発生し、簡易テストの受験者となった。

本年度から４学部のクラス分けを短期間で実施することから、受験番号と氏名のマークエラーを極力抑える必要があった。そのため泉の実施本部では、記入済み解答用紙をすべてチェックし、エラーを可能な限り修正してから箱詰めすることにした。今回この過程で、予想を越える広範囲のエラーが発見された。法律学科と歴史学科の各１室で、ほとんどの学生が氏名欄を記入していなかったのである。この２室の監督者が記入指示をしなかったと推測される。本部では、センター長を含む７名で手分けをし、新入生名簿を参照しながら、空欄になっている氏名をアルファベットで書き入れ、文字をマークした。このトラブルにより、全体の作業が１時間程度は遅れたと思われる。資材発送が遅れると、スコアが出るのも遅れ、クラス分け作業の開始が遅れる。今回はそういう事態にならなかったが、監督者は十分に気をつけてもらいたい。

全受験者2649名のスコアは予定通り、実施翌日の夕方にダウンロードできた。所属コードや受験番号のマークミスにより、所属集団からはじかれた学生は57名だった。本部でチェックを行ったことで少なく抑えられたと思う。新入生名簿を参照しながらこのエラーをまず修正し、学科ごとにデータを分ける、という作業を渡部が数時間かけて行った。

その翌日、センターの実務者会議メンバー（前出の７名に加えて新任の薄井特任講師も陪席）が集まり、学部ごとにクラス分けする作業を行った。取りかかってすぐに、本年度の新入生のスコアが全体的に、前年度よりも高いことがわかった。何点でグレードを切り分けるかは予め決められており、前出の「英語履修ガイド」にも記載されている。それに従うと、上位に配属されるべき人数が多くなり、グレードaやbの開講数を増やさない限りクラスが大きくなってしまう。一方で、eグレード（「ベーシック英語」履修対象者）は、いくつか閉講できるくらい、人数が少ない。

協議の結果、各グレードの開講クラス数はそのままにし、グレード切り分けのスコアを高めにして、上位クラスの人数を抑えることにした。また、グレードeは各クラス10人未満になってしまうが、各特任講師が少人数を丁寧に指導する方針とした。ちなみにグレードcやdも小さめのクラスになった学科が多い。

クラス配属の結果は、文系３学部では各学部の代表教員にエクセルの表で渡され、オリエンテーションの中で新入生に通知された。しかし、リーダーの学生やオリエンテーションに関わる教員が、その表の意味をよく理解していなかったようで、履修登録の際にかなりの混乱とエラーが発生した。一方、工学部では、配属結果を多賀城教務課が受け取って履修登録作業を行ったため、そのようなことはなかった。

クラス配属の変更希望は、グレードaとeの学生のみが願い出ることを認められている。センター事務室で希望を受け付け、特任講師が個別に話を聞き、変更が妥当と判断されれば認めた。グレードaは原則英語で授業が行われる。このことに不安を覚えた学生が数名いたが、面談をして励ますと不安が解消することが多かったようである。一方、「テストの途中で寝てしまいスコアが低くなったが、eクラスの内容は簡単すぎるので配属を変えてほしい」と訴えてきた者もいた。しかし自分の実力を証明する検定試験の実績を持たないため、変更を認めなかった。

スコアが低すぎてグレードeに配属される学生は、「ベーシック英語」が履修科目として純増になる。よって上記のような配属変更の訴えがあったり、履修態度が悪くなったりしてもおかしくないが、そういった学生の報告は少ない。特に工学部では、クラス配属発表と同時に、「ベーシック英語」を履修する意義を（英語担当ではない）教員が諭したことが功を奏してか、学生の履修態度は良好だったと聞いている。

３．成績評価を巡って発生した問題

新カリの必修英語では、成績が本人の英語力をある程度反映するように、獲得できる点数の幅がグレードにより決められている。例えば、グレードaはクラスの中央値90、最高点100であるのに対し、グレードdは中央値75、最高点90である（詳しくは「英語履修ガイド」参照）。このように、上のグレードに配属された方がよい成績を取りやすい制度にすることには、ともすれば下位の「楽な」クラスに流れがちな学生を食い止め、なるべく自分の実力にあったクラスを受講してもらいたい、というセンターの意図がある。

この件については、秋の説明会やシラバス執筆依頼を通して各担当教員に知らせてあり、前期の成績を出す時期が近づいた頃に再通知した。教員からの「どうやって調整すればよいのか」という問合せは数件のみだったが、成績提出完了後、学務係から開示を受けた対象全クラスのデータをセンター事務員と特任講師が確認したところ、最高点と中央値が指定から逸脱しているクラスが少なからず見つかった。

「英語履修ガイド」に掲載されている数字と違っている場合、成績発表後に学生からの問合せが発生し、成績修正手続きに追われる可能性が高い。また新カリ初年度から逸脱を容認すると、その後の運用が難しくなる。そのため今回は、指定された数値になっていないクラスの成績をセンターで全て補正し、一括して教務課に成績修正を届ける、という対応を取ることにした。各教員には、成績を修正したことを事後報告している。

なお、成績提出後の修正は、手続きが煩雑になることが明らかになったため、後期は成績算出に不安がある教員には、事前に一度センターに成績を提出してもらうことにした。センターがチェックと点数補正を行って教員に戻し、それを教員が入力する、という手順を踏むのである。

新カリ開始に伴い、成績をセンターで中央管理する必要が生まれたことで、やりにくいと感じている教員はいるかも知れない。しかし一方で、今回各教員が出した成績をチェックしたことで、今まで見えにくかった問題を発見することができた。それは、成績評価を適切に行っていないと思われるケースが、限定的ではあるが存在する、という問題である。

ある教員は、合格者全員に同じ点数を与えていた。これが指定の中央値と異なっていたため、全員の点数を指定中央値に修正したが、センターではそれ以上の調整は何もできなかった。履修者の学習成果が全く同じになることは考えにくいため、この教員は、各自の学習成果を評価する作業を行わなかったと思われる。

別の教員は、開講時に自身が示した成績評価配分を変更し、変更を学生に告知せずに成績を出していた。このことは、前期の成績発表後、不合格になった学生から教員宛に質問状が出される、という所定の手続きの中で明らかになった。渡部が立ち会って両者の話を聞いたところ、教員の対応が不当と思われた。そして訴え出た学生だけでなくクラス全体に影響が出ていたことから、当該教員に全履修者の素点の提出を求め、それをシラバス通りの成績配分で計算し直し、センターの責任で成績を一括修正した。

このような不適切な成績評価は、これまでも行われてきた可能性がある。しかしこれまでは第三者によるチェックがなかったため、学生が質問状を出さない限り修正に至らなかった。センターが成績評価の大枠を設け、それを学生と担当教員が共有し、それが守られているか監視されるようになったことで、公正性への意識が高まり、問題の発生を抑えることができるのではないかと考える

４．学生と教員の実態を知るための調査

センターでは、特任講師４名が中心となって２種類のアンケート調査を実施した。１つは、新入生が英語の検定試験（英検やTOEICなど）をどの程度取得しているかを調べたもので、前期にインターネットを使って実施された。この結果から、検定試験と呼ばれるものを一度も受けたことがない者が多数を占める、という実態が明らかになった。この調査については、本稿の第６節で詳しく報告する。

もう１つは、本学の必修英語を担当する教員（専任および非常勤）が、どのような考えで、学生とどのような関わり方をしているかを尋ねる調査である。こちらは12月に紙媒体で実施された。センター発足以前から、多くの教員が本学の英語教育に携わっているが、教員間で「英語教育のあり方」を改めて話し合う機会は、ほとんどなかったのではないかと思われる。センターでは、そのような機会としてFD研修会を年度末に設けたいと考えた。この調査は、その足がかりとして実施されたのである。結果は２月に実施予定の研修会に組み込まれる予定である。

これらに加えて、新カリ必修英語の教育成果を見るために、１年生の英語力を後期末に測定することにした。具体的には、４学部の１年生800名弱（グレードごとにクラス単位で抽出）に対し、１月に再度TOEIC Bridgeを受験させる、というものである。この事業は、学長教育改革研究助成金の支援により実施される。結果は年度内に分析できると思われる。

ただし結果は、それほどきれいには出ないと予想する。まず入学時にすでに高得点の学生（グレードa）は、天井効果により得点の伸びが出にくいだろう。また検定試験の点数は一般に、学習期間や学習量と必ずしも比例しないことも知られている。しかし１年後には、新カリ必修英語２年間の学習成果を測定しなければならない時が来る。その時へ向けての試行として、今回の事業は必要である。

５．新カリ２年目に向けて

2018年度に向けての準備はすでに始まっている。まず、カリキュラム運営に関する教員への説明会を、９月の連続する４日間に渡って、昼休みの枠で実施した。また10月には新たな試みとして、教科書見本の展示会を連続する５日間に渡って開催した。これは、教員の教科書選定を助けるための企画である。どちらも参加者・利用者は少なめではあったが、情報発信の方法として維持する考えである。なお「英語IIA」「英語IIB」の教員は教科書選定において、１年次で使用されたものと重複しないように注意する必要がある。そのため、１年次に使用された全教科書のリストを講師控室に掲示した。その近くには昨年度同様、センターが分類したグレードごとの教科書見本が置かれている。

加えて、４学部の新入生へ向けて「英語教育センターからのお知らせ」というタイトルの説明動画を作成した。これは前年度入学前の時期に、TOEIC Bridgeや英語授業についての質問が大学生協に多く寄せられた、という報告を受けてのことである。この３分半の動画では、英語試験の結果により５段階のクラスに分けられること、補習授業が課されるのを避けるためには、入学前に英検３級程度の力をつけておくことが望ましいこと、などが説明され、「どんなテストか？」「どう勉強すればよいのか？」など、想定される質問にも答えている。英語教育センターのHPですでに公開されており、泉生協主催の新入生向け説明会でも使用されているので、オリエンテーション関係者にもご覧いただきたい。

今後、本年度内に完成させたいプロジェクトとしては、新入生向け履修ガイドの更新の他、新２年生向け履修ガイド、および英語担当教員向けのマニュアルの作成が挙げられる。新２年生には後期末にTOEIC Bridgeの再受験が義務づけられ、これが「英語IIB」の成績に組み込まれることになっている。この点を中心に、いくつかの注意事項を冊子体で伝える必要があると思われる。また、教員への情報提供はこれまで統一的に行われていなかったため、混乱が起き

やすい状況であり、先述の通り実際に問題が発生した。この状況を改善するために、主要な情報を冊子にまとめることが急務である。

前節で触れたFD研修は、この文脈の中で開催される。専任校をもたない英語教員は少なからずいる。本人の意識が高くない限り、現在進行している大学運営改革や英語教育改革について知る機会を、彼らはなかなか持てないだろう。だとすればセンターは彼らにとっての重要な情報源である。これまで、必修英語の共通化と４技能化はもとより、達成目標の明確化や期末試験の廃止などの方針は、シラバス執筆を依頼する際に文書で通知されるだけで、「なぜ」が説明される機会がなかった。その機会を作ろうというのが、今回の研修の主たる目的である。同時に、授業のあり方を具体的に考える最初の一歩としたい。

６．2017年度入学者の検定試験受験状況（矢島・薄井）

近年文部科学省は、「社会のグローバル化」に対応した人材の育成を目指し、高等教育機関において英語の４技能の重要性を謳っている。そのため、大学英語では、「聞く」「話す」「書く」「読む」という総合的な英語力をさらに伸ばしていく必要がある。高等学校学習指導要領によると、高校卒業時には基本的な英語力を身につけていること、すなわち英検（日本英語検定協会が実施する英語検定試験）で言えば、準２級程度の英語力を有していることが望ましいとされている。では、実際に本学の学生は、どの程度検定試験を受けているのだろうか。大学入学時における学生の英語力を把握し、今後の授業に生かすこと、さらに入学予定者に対して学習に関するアドバイスをすることを目的とし、センターでは、英語学習に関するアンケートを実施した。ここでは、今回のアンケートから検定試験受験状況、特に「英検」について調査した結果を報告する。

6.1.　調査の概要

本調査では、新カリキュラムを実施している４学部（経済・経営・法・工学部）８学科（経済・共生社会経済・経営・法律・機械知能・環境建設・電気電子・情報基盤）の2017年度入学者の中から計1030人を対象に、webを用いたアンケートを実施した。アンケートは、web上のGoogleフォーム[1]を使って矢島と薄井が中心となって作成したものである。学生には、授業のはじめに、QRコード[2]を配布した。学生はそのQRコードを各自のスマートフォンなどで読み

[1]　Googleフォームとは、Googleのアカウントがあればアンケートなどをweb上で簡単に作成することができる無料のツールである。

[2]　QRコードとは、四角形のバーコードで、それを対応する機能を持った端末で読み取ることで、QRコードに含まれた情報を取得できる。

取り、回答した。所要時間は３～４分程度であった。なお、スマートフォンを所持していない学生は、授業後にコンピューターからInternet Explorerのようなウェブブラウザに URL（http から始まるアドレス）を入力し、回答した。アンケートは、2017年６月26日から2017年７月21日までの４週間という期間で行われた。質問項目は、「グレード」、「入試区分」、「英検の取得級の有無」、「英検の取得級」、「英検の取得年月日」であった。

6.2. 結果

回答数は、1030人中895人（回答率87%）であった。895人中、英検の級を持っている学生が395人、持っていない学生が500人であった（図１）。取得率は、44%にとどまり、半数以上の学生が、大学入学前までに英検を受験していない、または級を取得していないということが明らかとなった。

入試区分別をみていくと、英語の筆記試験（一般入試前期・後期およびセンター試験利用）を経て入学した学生の英検取得率は51%であり、英語の筆記試験を経ていない学生（スポーツ・学業・資格取得・文化活動・TG推薦およびAO入試による入学者）の英検取得率は36%であることがわかった（図２）。

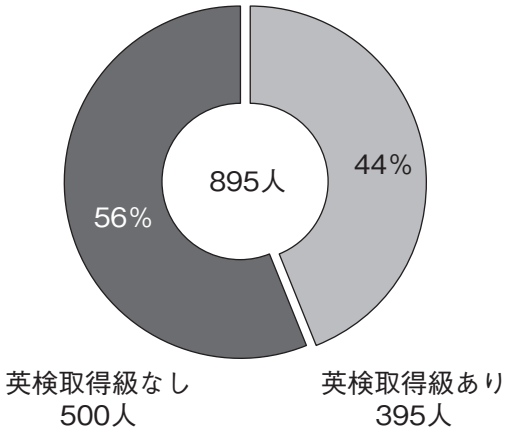

図１：英検の級の有無

	２級	準２級	３級	４級	５級	なし	計
英語の筆記試験あり	26（5%）	91（19%）	105（22%）	22（5%）	3（1%）	240（49%）	487
英語の筆記試験なし	6（1%）	26（6%）	83（20%）	28（7%）	4（1%）	261（64%）	408

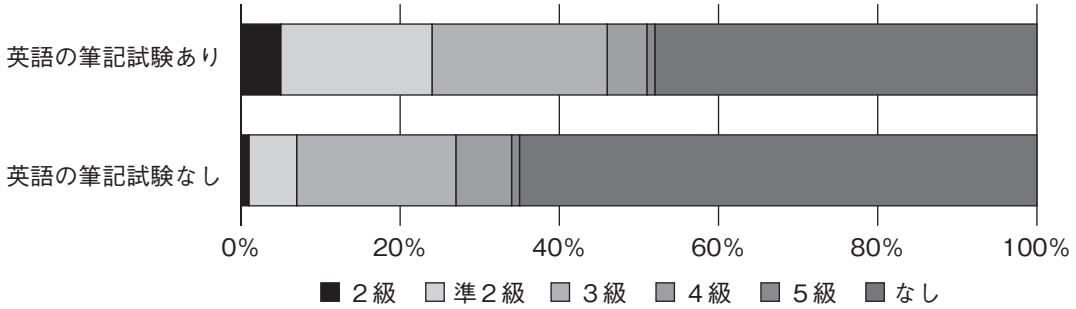

図２　入試区分別英検各級取得者数

グレードごとの英検取得者数をみていくと、aが61％、bが47％、cが43%、dが29%、そしてeが19%となった。グレードが高いクラスほど英検各級の取得率が高い（図３）。

	２級	準２級	３級	４級	５級	なし	計
a	22（10%）	48（22%）	51（24%）	8（4%）	1（0%）	84（39%）	214
b	6（3%）	40（18%）	46（21%）	12（5%）	1（0%）	119（53%）	224
c	4（2%）	27（12%）	54（23%）	11（5%）	3（1%）	131（57%）	230
d	0（0%）	2（1%）	32（18%）	16（9%）	0（0%）	125（71%）	175
e	0（0%）	0（0%）	5（10%）	3（6%）	2（4%）	42（81%）	52

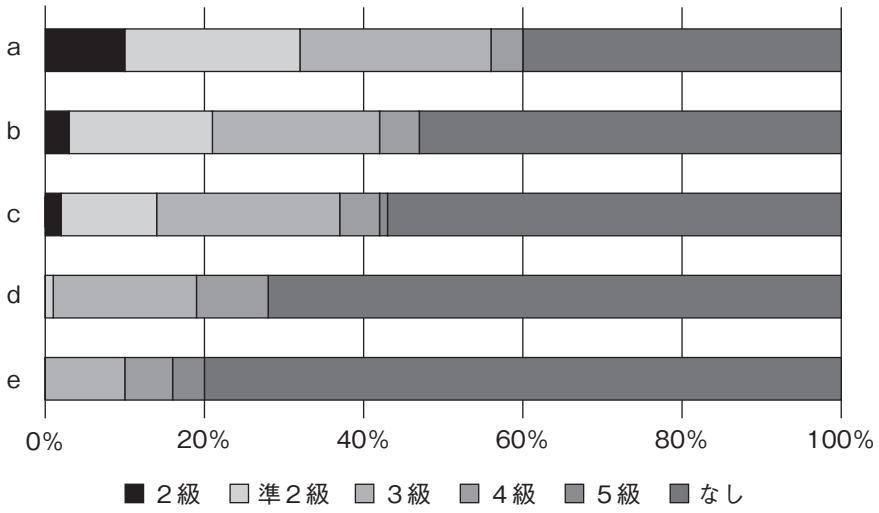

図３　グレード別英検各級の取得者数

6.3.　結論

中学卒業レベルが英検３級だとすれば、高校で学んだ英語がいくらか身についたと言えるレベルは準２級であろう。しかし、今回の調査結果からは、準２級以上を取得している者は17%ほどしかおらず、そもそも英検を受験し合格したことがない者が56%もいることが明らかになった。このことは、目的や目標がないまま仕方なく、あるいは何となく英語学習を続けている学生が多いことを示しているように思われる。

また、入試形態が英語力と関係していることも確認された。グレードの高いクラスに属しているほど、英検準２級や２級を取得している学生が多く、これらの学生は、英語の筆記試験が必須とされている一般入試や大学センター試験で入学している。一方で、グレードの低いクラスに属している学生は英検取得率が低く、英語の筆記試験を経ずに入学している者が多い。このことは、英語の筆記試験を受験することなく入学が早く決まるという状況が、英語学習に対する学生の認識を低下させ、学習不足につながる原因の一つになっていることを示していると

考える。英語力の高い学生や、英語に興味や関心のある学生の確保、そして推薦系入学者への学習支援を見据えて、入学までに英検などの英語検定試験の受験を推奨するような取り組みが今後より必要になってくるといえるだろう。

今年度からセンターでは、新入生向け動画（第５節参照）の中で、入学前までに取得しておくべき英語力について触れ、英検の受験を勧めている。また在学生を対象に、TOEIC受験のための勉強会も試験的に始めた。今後も英語検定試験受験への支援を充実させていきたいと考えている。

最後に、今回のアンケートでは、スマートフォンなどからQRコードを読み取る方法を用いた結果、87%の回答率を得ることができた。これは、スマートフォンが学生にとって身近なツールであることを意味している。今後の授業運営、そして英語教育におけるeラーニングの導入においても、スマートフォンの活用は十分に検討に値すると考えられる。本学における英語教育をより充実したものにするために、センターでは、今後も英語学習についての調査を継続し、それらを実践的に活用していきたい。